粕壁夜行記

大町桂月

青空文庫

第三回の夜行を粕壁に爲すこととなりけるが、夜光命も來らず、十口坊も來ず、山神慨然として、『妾を伴ひ給へ』と乞ふ。似たもの夫婦と、人や云ふらむ。裸男承知して、將に家を出でむとすれば、伊藤薊山、上京したるばかりの足にて、來り訪ふ。裸男の行裝を見て、『何處へ行く』と問ふ。夜行の事を告ぐれば、『相變らず元氣なる事かな。われも共に行かむ』といふ。『われを元氣といふ君こそ、相變らず元氣なれ』とて、相笑ふ。薊山今は太田中學校の教員なるが、裸男とは青年時代の舊學友にして、殊に遠足仲間也。幾んど日曜ごとに遠足したりき。いづれも貧乏書生の事とて、人並に汽車に乘る贅澤は出來ず。十四里の鎌倉へ、徹夜して行き、徹夜して歸りたることもありき。徹夜するのみならず、野宿したることもありき。或時、日は暮れかゝる、雨はふる、寒さ身を裂く、腹はペコ〳〵になる、薊山小便せむとするに兩手凍えて、自からズボンの釦を外すこと能はず、裸男代りて外してやりたることなどもありき。兩人とも當時盛んに遠足したればこそ、今日の元氣もあるなれと、裸男ひそかに鼻うごめかす。

義甥の鹽井健男、同西山巖夫、甥の政長、豚兒三人も加はり、總勢九十三人、午後九時を以て、千住大橋を發足す。

參謀本部測量五萬分の地圖に據りて見しに、大橋より粕壁町の入口まで七里十一町あり。例に因りて、裸男幹部となりて、一行に殿す。薊山もあり、畫家の岡本一平氏もあり、西村醉夢もあり。山神は之に加はらず、少し前の方を歩ける樣子なりき。

千住大橋より二里十二町にして、草加町の入口に達す。家竝の長さ十三町あり。町幅ひろく、宏壯なる家も少なからず。うつかり『さうか』と返事すれば、『さうかは千住の先だよ』と、よく江戸ツ兒の駄洒落云ふは、こゝの事也。蒲生に至りて、幹部の四人休息して、握飯を食ふ。裸男携へたる竹のステツキの栓を外し、先づ自から之を口にあてて、一口飲む。一同『何だ』と問ふ。『酒だ、飲み給へ』とて薊山に渡せば、『なる程酒だ』。一平氏も、醉夢も、『酒だ〳〵』。一同大いに喜んで、順次ステツキをまはして、飲み盡くす。これ裸男が自製新發明のステツキ也。中に入れたる酒の量は、二合五勺あり。『杖頭の錢』といふことは、支那にありたるが、『杖中の酒』は、他に其例を聞かずと、一同の喜び興ずるを見て、裸男大得意也。

越ヶ谷を過ぎて、始めて鷄鳴を聞く。『鷄聲茅店月、人跡板橋霜』の古句、今に新たなるを覺ゆ。ステツキの酒に一同元氣づきしが、草木も眠る丑三の空、眠くはなる、脚は疲れる、休息すること數多くなりぬ。一平氏疲勞すること、最も甚し。『千葉に行きし時は達者なりしに』と訝れば、『あの時は達者なりき。爾來一年餘、身體肥るにつれて、脚力は衰へたり』といふ。四五町毎に一と休みして歩みたるが、粕壁の旅店に達したる時、夜は未だ明けざりき。

例の如く、朝食を終へて、解散すれば、雨恰も至る。裸男は幹部其他の有志と共に、粕壁中學校に赴きて演説す。校長を誰かと見れば、松崎求己氏也。川越に夜行したるは、凡そ一年半の前なるが、當時松崎氏は、川越中學校の教頭にして、校長に代りて、我等を迎へられたり。今重ねて、こゝに相見むとは、思ひもかけざりき。

幹部の四人に、山神、豚兒、豚兒の友人も加はりて、關東第一と稱する牛島の藤を見物し、且つ酒し且つ食したり。粕壁驛より東二十町。千年の老木、房の長さ五尺に及ぶと稱す。この日は五月六日、房の長さ、まだ二尺に及ばず。期早かるべし。記して、後の遊者に告ぐ。

（大正五年）

青空文庫情報

底本：「桂月全集　第二巻　紀行一」興文社内桂月全集刊行會
　　1922（大正11）年7月9日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：H.YAM
校正：門田裕志、小林繁雄
2008年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

粕壁夜行記

大町桂月

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/